

JAPAN GET-ACQUAINTED PROGRAM

NEWS LETTER NO. 1

September, 1961

Editor
Hachiro Kubota

近頃CBAがしきりにアダムスキを攻撃し、機関誌中のアダムスキに關する記事はことごとく皮肉な調子で書かれてあつて、「この際やつつけてしまえ」といふような分裂感情が溢れているのを感じます。これは或る方面から出た怪情報、すなわちアダムスキは悪の手先であるという説をCBA幹部が信じただからであり、そして私までをブラックだと云ひだしたのは私がアダムスキを支持しているからというよりもむしろ個人感情がたふんにからんでゐるからと思われまゝ。私に云わせればこれらは誤解以外の何物でもなく彼らの自己拡張の心のあらわれであるとしか思えません。しかしはじめに考えようとされる人が非常な嫌疑におちりつて、その結果円盤問題に關する興味をも失うようになられるのは残念でありますので、ここにいさゝか新しい情報を提供し、私の考えをつけ加えて、ご参考に伏したいと存じます。

X

X

ジョージ・アダムスキは悪の手先ではないと私自身思ひます。私の感ずるところではクリシュナムルティー氏に匹敵するほどの、おそらく今世紀最大の偉人群の一人であると思われまゝ。そしてそのことがみとめられるのは彼の死後、地球のロケットが太陽系の諸遊星へひんばんに着陸するようになってからだろうと思ひます。これは一冊や二冊の書物を読んだだけで判断したことではなくて、彼から直送される書簡類や各国の研究団体から来た膨大な情報類を調査研究した結果、確信をもつようになったのであります。たんなる盲信ではないつもりです。私と同様に各国の研究者が彼を偉大だとみなす理由は、彼の異常な体験よりもむしろ彼の思想に価値をみとめてゐるからです。その価値は時代の進歩とともに精神科学、特にテレパシーの研究熱がたかまつてくることによつて認められるようになるでしょう。しかしそれはほど遠いことです。

およそアダムスキほどに世界中から非難と嘲笑を

浴びた人はいないでしょうが、また彼ほどに他を攻撃しない人もありません。彼はたいぶ前から G. P. Acquainted Program (略称 G. A. P.。知り合いになる運動) という組織をもちました。これは、他の進化した遊星では誰もがみな知り合っていて未知の人というのはいないにもかかわらず、この地球では未知の人があまりに多いために不和や闘争が生じるので、我々はなるべく多くの人と知り合いになり友達になるほうがよいという趣旨のもとにつくられたもので、現在は十七ヶ国の研究家がこの組織に加わっていて、各自が研究グループをもち、定期的に情報を交換し合っています。そしてアダムスキを最も強く支持している円盤研究団体は、最高の円盤研究誌として知られる英国の「空飛ぶ円盤評論」誌の編集陣です。二この編集顧問である J. M. レイド氏はかつて G. A. P. の英国代表者でした。この研究誌は現在まで一貫してアダムスキの撮影した円盤写真だけを十枚一組で(ただしその内一枚は

けはオーガスト・ロバート氏の撮ったもの) 希望者に頒布しておりまして、CBA がまうように「アダムスキの撮った写真のすべては模型を写したものである」というのが世界の定説である」という説明がどうぞらしいウソであることがわかります。模型を写したような写真を「空飛ぶ円盤評論」誌ともあろうものが頒布するわけがありません。かつて CBA の幹部として働いた私は幹部達の粗雑な言動に悩まされたものでしたが、このことは詳述を避けることにしましょう。

今春の或る日、アダムスキから長文の書簡を受けとって一読した私は、これが CBA のコンタクト・ケースを支持することを意味するものであると感違ひして、早速その旨を某幹部宛に知らせましたが、そのことがともそのもの間違いでした。アダムスキは CBA のコンタクトを決して認めていなかったことがのちに判明したのです。しかしその頃はまた私も松村氏の体験の眞実性を信じていて、五月三日に福

3

岡で講演を行なったあとのディナーのときにもそのことを話した記憶があります。それより少し前に私は小川氏宛に親展状を出し、CBAのやり方がよくないために会員間に非難の声があるのもっとしっかりやろうではありませんか、といった意味の一種の檄文を送ったのですが、これは当時小川氏が編集上で担当な発言力をもっておられるのだろうと考えたからでした。そして非難の声があったのも事実で、たとえばCBAでは原稿を書きもしないうちから書籍の広告を出して金だけを先取りするといったやり方や、膨大な寄付金を乱費しているとかいふ噂は相当地方の会員も知っていたのです。その頃小川氏がボードを信じておられたことを全然知らなかった私は氏の好意ある返事を期待していたのですが、この親展状がどうしえわけか松村氏に言われたのです。そして私までが小川氏と組んでボード事件の一味となって策動していると誤解された松村氏は、突然私宛に速達で激怒の手紙をよこされました。それ

はまるで脅迫状であり、血迷った恐ろしい文面の手紙で私はそれを読んだ日は恐怖でメシが喉に通らなかつたほどです。つまり、速刻上京して意見を開陳せよ、まなければおまえの責任問題にまで発展させてやる、といった意味のことが自筆で言かれてあつたのです。氏が激怒しやすい性格の人であることはかねてから知っていましたか、それは純真さのしからしむるところだろうかと善意に解釈していました。しかしどうもこの解釈はあつてはなかつたようです。それよりも私が突に不思議に思つたのは、氏のように感情を抑制することのできな人が地球人の代表としてよくもコンタクトマンに選ばれたものだということです。そして氏がコンタクトしている人々を「宇宙人」なるものの正体について深く考えざるを得なくなってきました。そういえば、大震災発生の予告とそれに関連したさまざまなおそろしく馬鹿げた計画や活動など疑惑のフシが多くあり、その「正体」について私は私なりの臆測をもっています。

すけれどもここでは省略することに致します。

ところで「アダムスキの秘書」であったルーシー・マクギニス女史は世界中の四盤問題を調査してきた人であり、いわば各国のコンタクト・ケース解明の或るカギを握る人物であると思われるので、七月二十一日付をもって私は女史宛に長文の質問状を出してみました。この人は思想的にも気高く、まれにみる賢明な婦人であると私は思っておりますし、その情報は一読の価値があると考えています。その回答が来る前に同女史から七月二十二日付で長文の書簡が来ました。これはアダムスキ一家が財政難からパロマーの財産を売却して他の町へ五月に移動したことと、それを機会に女史も社会保障の資格を得るためにアダムスキのもとを離れたことを報じたものです。この文面で女史の考え方が或る程度わかりますので、重要な箇所を次に抜粋してみましよう。

「しばらくのあいだ私はアダムスキ（または他の誰

か)の印象に私の印象を従わせるよりもむしろ私自

身の印象に従うことのできる道を見出さねばならぬ」という感じをもっていました。彼のために私は「じぶん長いあいだ働いてきたのです。彼に会った人のなかには彼がきわめて支配的な個性の人物であることを知っています。もしあなたが私を知ったならば、私もまた同じような性質であることに気づくでしょう。しかし、働き手は指導者の命令に従うべきものであると私はいつも考えていました。プログラムは宇宙人のそれであって、世界中の人々に知識をわかつためにアダムスキによって指導されてきました。このために私はアダムスキの印象に私自身の印象を従わせたのです。もっとも私は、自己成長における最も重要な要素の一つは自分自身の印象を認めてそれに従うことを学ぶことであると多くの手紙で書きましたけれども……。こんなふうにしてこそ人は望ましい考えから真実の印象を区別することを学

ぶのです。どうぞご理解下さい。」

一九五九年にアダムスギが海外から帰ったのち、彼と私が交した或る会話のあいだで彼は云いました。『ルーシー、一体どうすればあなたは自分自身を助けることができないうきに他人を助けることができると考えるか？』私はこれがすばらしい質問であると感じ、ただちに解答を求め始めました。この質問は私がなそうとしていたあらゆることに一つの新しい視野を与えたのです。』

『長いあいだ私はアダムスギからすいぶん多くを学んできました。私はこの知識を皆さんがなしているのと同じような無感乾燥な世の中の仕事に応用しなければなりません。』

『彼の訣別け長いあいだ私が説いてきたことを実行するようにと私の内奥でせきたてる力によるのに、すきないということはどうぞ理解して下さい。私が彼と共にいた長いあいだの彼の体験、すなわち“実見記”や“回家記”や私たちの無数の手紙のなかで述べられた体験は、私が生きる限り支持するつもり

です。私は彼の最初のコンタクトの目撃者であったことをお忘れにならないように。私たちは真実であることを知っている物事を決して否定はできないのです。私はこの“知識”を基礎づける証拠をもちませんが、他の力をもってしてもゆすぶることは決してできないという内奥の確信をもっております。それは反対の報告もあるでしょうが、しかし私からの報告を事実として考えて下さい。過去には誤った報告もありました。私たちはこれをどうしようもありません。私たちは真実であると知っている物事にたいして真実であり得るだけ、です。』

『すつと以前に、それのために私たちが集められた物事を私たちは完成したと思ひます。そのため私たちが存在せしめられたと二つの“父”の意志を遂行するために新しい道が今開かれています。私の祈りはすなわち、私たちは勇敢に賢明に前進しようとして私たちのすべてが受けついでいて、しかもその力においてはきわめて破壊的なあの個性という特

性から自分たちを自由にしよう、ということにあり
ます」

X X

次に前述の七月二十一日付の私の質問状にたいす
るマクギニス女史の回答をかがげることになります。

これは八月十五日付の航空書簡でよこされたもので、
二二では最初の十行ばかりを省略します。

同 ジョージ・アダムスキはどんな人ですか？

私(註、父信)はいつもアダムスキを私の理想とし
てきました。彼は聖フランシスのような人ですか、
それともハイド氏のような人ですか？ あなたは彼
を聖人だと思えますか？

答 アダムスキは聖人ではありません。彼は人
生の行路を歩みながら偉大な知恵と理解力とを身に
つけたきわめて力強い人です。また彼は数多くの体
験をも積んできましたが、同胞を援助するためにそ
の体験を世界に知らせました。そうすることによっ
て彼は古い束縛された諸理論のために役立ち、人

類をこの小さな遊星に閉じこめなきずなを開放し、

より大きな興味ある生活と、彼がもとは何も無い空
間だと考えていた宇宙への旅にたいする希望を人類
に与えました。彼は正式な教育をほとんど受けてい
ませんが、偉大な勇氣をもっていて、そのために教
育のある人々があえて試みようとしなかった物事を
成就することができたのです。

同 ニ 彼は大酒飲みだと云われていますが、それ
はほんとうですか？ (註、CBAの円盤メッセージにその
よつな記事が出たので、この質問を出して)

答 彼は大酒飲みではありません。ときどき社交
上飲むことがあります。しかし大抵の人は、特に
米国ではそれをやります。私はそんなことが人間の
欠点になるとは思いませんし、あなたもきつと思わ
ないでしょう。

同 ニ 存知のようにこの国には松村雄亮という
有名なコンタクトマンがいて、彼は一九五九年の夏
以来、他の遊星から来た宇宙人とコンタクトを続け
ていると称しています。しかし私の考えでは、この

宇宙人たちはアダムスキの宇宙の友人たちとは異なるようです。アダムスキはこの事実を認めましたか？ 松村氏の体験はアダムスキの体験と関係がありますか？ それとも多くの異なる宇宙人がこの地球へまっつあるのですか？

〈答〉 もし松村氏が実際に肉体をもつ宇宙人とコンタクトしてゐるとすれば、たぶんそれはアダムスキが会った如何なる宇宙人とも全然異なるようです。

私たちのこの太陽系内の隣人たちの行爲とは全く違つた行爲をするように思われるその種類の訪問者についてには私は全然知りません。彼らが松村氏に一方的にテレパシーの能力を与え、彼の生命を危険に陥れられるようなことを仕向けるというのことにたいし(註、この事については別に詳報を送つた)、彼らがこの地球の人間であろうと他の遊星から来たのであろうと、私なら彼にたいしてその宇宙人なるものに警戒せよと忠告したいところでは、私がこれまでに知り得る限りでは、それが他の遊星人であるということ

は疑わしいようですし、また土星とは全く関係がありません(註、松村氏が土星に着陸したという語を知らせたいことに關する記事)。アダムスキは多数の土星人と会いましたが、彼らの誰も他人に一方的に想念を押しつけるようなことは全然しないということでは、

私たちは誰もが自分で食物を食べ、自分で生長し、そして自分で学ばねばならないと同様に、私たちは無限者々の意志を行なおうとするならば、自分で考え、自分で自己の内奥の導きの手に気づいてそれに従うようにして、自分自身の生命の主人にならねばならない、ということをや彼ら宇宙人は知っているのです。

〈問 四〉 ショージ・ウィリアムスンについて、あなたはどうか考えますか？ 彼はきわめて知性的で宗教的感性の高い人であるによく云われています。もちろん私は彼が約十年前に「デザート・センター」における六人の目撃者の一人であったことを知っています。しかし彼はあまりに独断的であつて眞理の探求者と

はいえないうです。彼の数々の著書はUFO研究書のなかで最もわけのわからぬものであり、特にライオンの隠れ家。に至っては尚更です。彼の著書である『宇宙語—宇宙人』をあなたはどう思いますか？ 同書に掲載されている例の『足跡』の解説をあなたはナンセンスだとは思いませんか？

△答シ ショーシ・ウィリアムスは心霊の分野に入ってしまった。私はそれを支持しません。彼はそれに入る前にこの分野の知識をもちませんでした。私の意見では、盲目的にそのような事をせんさくするのはきわめて危険です。人類学者としてウィリアムスはすぐれているかもしれませんが、それは私にはのりません。彼は今、南米での科学的探険に關する講演を行なっているというのですが、私がこれまでに行なった程度の調査によって知り得た限りでは、彼の宇宙人に關する発表で私が聞いたことはすべて真実ではありません。私は彼の著書をあまり讀む暇がありませんでした。これはその著書から

受ける感じが読書に時間をかけようという気持ちを起させなかったからです。『足跡』に關する彼の解釈は完全に間違っています。そうです、私はそれをナンセンスだと思えます。

△問 五◇ C B Aの幹部たちは『黒衣の人間』すなわちまじめなUFO研究グループを妨害しようとしている『悪』の存在を信じ、それらがオリオン星座に源を発するものであると云っています。あなたもそう信じますか？

△答◇ 否、私は『黒衣の人間』がオリオン星座から源を発しているとは思いません。あまりに大きな噂がこの特殊な出来事と与えられつつあると私は思いますが、正直に感ずるところ、これは宇宙飛行についての興味をそらさせようとして人々の心に恐怖をうえつけたかっているこの世界の調査者たちであるとと思います。人々がとりあわなければこの問題は自然に消滅するでしょう。この種の出来事が起つてからすでに数年がたっていると思えます。

〈同六〉 CBAの会員たちは宇宙人の宇宙船の名

称が太陽語ソル・タール(註、宇宙人の言語と云われているもの)で、ヴェ

ントラックと呼ばれるのであると信じています。あるいはアダムスキからそのことを聞いたことがありませんか？

〈答〉 この種の愚かしい言語や、ヴェントラックという名称は心靈や霊媒から発したものです。宇宙の旅行者はこのような言語や名称を用いけません。私はこの実を確証してもらいました。

〈同七〉 ラインホールド・O・シユミット、ハワード・メンジール、そしてスタンフォード兄弟についてあなたはどう思いますか？ 特にシユミットが円盤でエジプトへ旅行した物語とメンジールの土星の音楽については？

〈答〉 私はスタンフォード兄弟が一機の宇宙船を見たと言張していることだけを信じます。しかし無数の人々がそれを目撃しているのですから、別に異常なことではありません。お尋ねの他の二人について

は私は全然支持することはできません。彼らの物語のただの一片をも私は全く信じておりません。

〈同八〉 松村氏が主張している宇宙人情報によれば、きわめて近い未来に地球の急激な傾斜が起り、世界の人口の殆どが死滅するということになっています。それでCBAでは会員と家族を或る一定の場所にひそかに集める計画をしており、そこで大気圏外から来る大宇宙船が着陸して皆を救出することになっています。これは真実のことであると思えますか？

〈答〉 私の意見では否です。アダムスキがこれまで知り得て私に語ってくれたすべてから考えますと、進歩した精密装置をもつ宇宙人でさえも自然の出来事の発生する時や場所を予告することは不可能なのです。彼らは、何かが起ころうとしているのではないかと危ぶむかもしれませんが、その性質を臆測するかもしれませんが、時々と時々を予告することはできないのです。

〈同九〉 アダムスキは自分自身の完全なテレパシ

ーの能力をもっているのですか？ 私は彼の著書である「精神感応」を非常に価値のあるものだと思っ

ていますが、しかしそのなかに述べてある練習を實行するにはあまりに困難です。この書によってテレ

パシーの能力を得ることに成功した人がいますか？

《答》私の知る限りでは、どこの誰でも完全なテレ

パシーの能力をもつ人はいません。宇宙の兄弟たち

でさえも失敗をすることがあるとアダムスキに語っ

ています。彼の著書「精神感応」に出ている練習法

については、それは實際にはむつかしくはなく、た

だ練習にあたって忍耐と不屈さを要するだけです。

結局、私たちの殆どはこの二つの面に練習を必要と

するのではないでしようか。そして私たちは新し

い努力を始める場合、一粒の種子から木が生長するの

を期待するよりもはるかに急いで結果を期待し

がちになります。しかしそのことをちよつと考えてみ

ば、この二つのあいだにさほどの相違はないのです。

《向一〇》あなたは日本へ来るつもりでいますか？

もし来るのならば、この町に滞在中のことは私が心配

配しましょう。

《答》日本へ行きたいのですが、それには多くの費

用がかかりますし、それを私はもっていません。し

かし私はできるだけ金をつためるつもりですし、充分

にできれば必ず旅行をしましょう。世界の各国を訪

ねることは楽しいことはありませんし、特に長い

あいだ一緒に働いてきた誠実な友達に会うのは尚更

です。ご親切を有難う。父の豊かさか私をあら

たの美しい国へ行かせるほどに充分に私へ注ぎかけ

られるとき、ご親切を受け入れることを楽しみにし

て待ちましょう。(註、以上で質疑応答は終る)

(ルーシーの付記)

あなたから去っていった人々(註、アダムスキを信じ

なくなつた人々)についてはどうぞ心配しないで下さい。

世界は大きく混乱し始めて、これまでになかったほ

どの変化が急速になされつつあります。人間は同じ

ものでもって他に報います(註、善は善を、悪は悪を)

あなたが理解をするとき、あなたは悔むことはありません。無限者の愛のなかでは、如何なる人間が企て得るよりもはるかに賢明にあらゆる物事が働き出すでしょう。(―中略―)しかし現在のところ私が云いたいことは、松村氏が知的でまじめな人であるというあなたの意見に同感ですが、しかし何者かが彼にたいしてきわめて残酷な欺瞞トリックをしかけているように思われます。私は彼が真実の宇宙旅行者たちに会って、肉体的に宇宙旅行をしたという感じがどうしてももてません。彼は一種の夢ドリームの状態でのような体験をしたのかもしれませんが。彼はどれくらいのおいだ宇宙旅行に出たのですか？そして彼の体験を友人たちは確証しましたか？

私は誰もがそうであるように私自身の印象を速べたにすぎないのですから、そのことをご銘記下さい

X

X

右のルーシーの手紙の、中略の部分には、CB

Aのコンタクトについてもっと詳細を知らせてくれ

11

ればもう少しよい回答ができるであろうと迷って、逆に私宛に質問がしてありますが、私はそれにたいしてべつに返事を出しませんでした。あれこれと考えながら日を送っているうちに、八月二十八日付の航空書簡でアダムスキから私宛に質問の回答が寄せられて、そのなかに次のような箇所があったからです。

X

X

そして私は彼が(註、松村氏が)コンタクトマンでないことをはっきりと知っています。あれは彼の心のなかで作上げられたことです。宇宙人ブラザーズがそのことを私に話してくれました。――後略

X

X

これは一つの資料として掲げたにすぎないのでありますから、そのつもりでご検討下さい。CB A 攻撃の材料ではありません。

さて、二二でウィリアムズについて言及しておくことにしましょう。彼をのが国で最初に紹介した

のは私だろーと思ひます。彼の著書「円盤は語る」の内容を要約したものをいつてしたか「オール読物」に出したことがありますか、その頃は私のUFOに関する知識はきわめて乏しくて（今でもそうですが）彼の著書の内容には真憑性あるものと考えていました。もちろん彼が心霊実験用文字板や宇宙通信機を用いたこととそれ自体は事実はらうと思ひます。イスラエル・ノーキンの「円盤日記」中に通信機の写真まで出ていたくらいですから。しかし、その後真実のUFOと心霊的なものとの区別を少しづつ知るようになってウィリアムスンにたいする見方が変わってきました。加うるに各国と情報交換しているうちにわかつてきたのは、彼はコンタクトマンでもなんでもなく、霊界通信をUFOの分野にもちこんだりしたために、UFOの科学的研究にひどい混乱をひき起したりして、アダムスキ側やアダムスキ側のいすれからも相手にされぬ人物であるらしいということだ。彼の著「宇宙語」宇宙人」中に載

っている「足跡」の解説を私は原書で一読して映き出したくなったほどあまりにそれはひどいという感じがしました。つまり彼は破滅で最初に発生したあの有名な事件の一人の目撃者の一人であったことは事実のようですが、そのわずかな体験をもとにしてUFOと心霊とを二に混ぜにして大創作をやつてのけた人なのだと思ひます。それについては各国からの見解がいろいろありましたが、最もすぐれた意見は漳州ブリスベーンのロイ・ラッセル氏が今年四月六日付でよこした書簡のなかの次の一節です。

X

X

「過去にいく度人も人類は生命のなかの」至上なる英知を一つよく理解している人々から真実の指導を受けてきました。しかしそのたがごとくその知識は「誤った解釈」をされています。さもなくば人類はそれを今日受けついでいて、その法則にしたがって生きていくでしょう。二千四百年前（オオネ）は真理

の言葉を殆ど書き残しはしませんでしたが、彼の教
 えは現代の最も「わけのわかぬ」宗教の一つに變
 じています。これはたぶんよい例であると思ひます。
 また、西欧のキリスト教は主としてパウロの書簡を
 土台としています。しかるにパウロは個人的には
 イエスに会つたことはなく、それゆゑに彼の書いた
 ものはその性質においてしばしば「わけのわからぬ」
 ものとなっています。どうやら「誤まつた解釈」を
 する者は真理の伝え手のあとで出て来る「學」のある
 人々であるように思われます。そしてウィリアムス
 ンが今それをやっていると云うのです。……ほんの小さな
 眞実々という種子からふくれあがつてゆく歴大な
 言葉と書物。今度こそ我々はその種子を失つては
 ならないと私は心から思つてゐる次第です」

x

x

宇宙證——宇宙人々を説かれた増野氏には更に
 気の毒ですが、この書は私がCBAから依頼を受け
 たのを増野氏に押しつけたかたちとなり、気のすす

まなかつた氏はそれでも黙々として翻訳に励まれて
 内容はともかく、立派な訳業を完遂されたのですけ
 れども、それにたいしてCBAは一銭の謝礼も一片
 の礼状もよこさず、ただ三冊の献本と講演会の切符
 を一枚よこしただけのことですが、しかし一言の
 不平も云われなかつた氏の態度は尊敬にあたひする
 と思つてゐます。

しかしこれなどは如何にもCBA的やり方として、
 「彼らも経済的に困つてゐるから謝礼や礼状などを
 出さないのも無理はないのだ」といつた考えは私に
 はあまり起りません。「彼らが何をやってゐるか」
 といつことよりも「彼らが如何なる人物か」を一般
 会衆よりも多少はよく知つてゐるつもりは、右
 のようなやり方を「当然のことだ」と思つてだけす。
 CBAにたいして批判的な言辭を速ぐる人をかたつ
 ぱしから「あいつはブラックだ」と罵つたり、寄
 付金を出し渋る人にたいしては「あんな奴には電
 報を送つてやらなただけのことだ」と激しい口調

ぞわめけていた或る幹部の顔が浮んできます。(註、電報とは、大震災発生時の集落地を知らせる暗号電報の意)

この人は中途から幹部になってCBAを一手に指揮していた人ですが、或る有書きをもつために皆からえらく信用されていきました。しかし、いま考えますと人柄というものが、有書き々に如何に魅せられやすいかということを感じずる次第です。つまり誤っているのは、有書き、そのものにあるのではなく、魅せられる人にあるのでしよう。かつての私もそうでした。

私は現在次のように考えています。すなわち人間個々の進化とは個人の「直感力」の向上することを意味するのではないかと。そしてこの「直感力」の向上をばはむものは外界にたいする「共鳴」なのではないかと思ひます。「眞実の愛」は「感受性」の最高のかたちであつて、これがテレパシーにつながるものであり、我々の追求すべき最終の目標であると思ひますが、しかし「共鳴」が「愛」を破壊する

ために我々は習慣的想念という牢獄から脱出することができません。グループ、イデオロギーなどにたいする「共鳴」という行爲が起るのは、恐怖心が潜在しているからであつて、それは云いかえれば「逃避」であり、そして「逃避」は防禦を必要とし、防禦されるものはいつか必ず破壊されるがゆゑに、さきさまの「共鳴」のあいだに絶えまない闘争が起るのであると考えられます。完全なる自由とはこのあらゆる「共鳴」が停止して自覚の発見という試みを自ら起し始めた状態を意味するのではないでしようか。そのためには一本の樹木が万象にたいして公平な態度で生きてゐるように、人間も自然の産物としての本質に自覚めて純粋なる自覚の発見への旅を始めることがすなわちグループへの「共鳴」以前の話題であると思ひます。「求道」とは要するに人間が「自然」との一体化に近づくための道を求めることを意味するのでないかと私は考えます。この世には人類を救う眞理活動だと称する団体が如何に多いことでは

よう。そして、共鳴と共鳴とが火花を散らし
 ていきますが、それはクリシュナムルティの云うよ
 うに、よせん、創造的理解力を失った、イデオロギ
 ーにたいする隷属以外の何物でもありません。もたろ
 ん、私自身もアダムスキヤクリシュナムルティに
 共鳴することは許されない筈ですが、彼らの思想
 に価値を認めることはできる筈です。なぜなら、ア
 ダムスキは私にたいして「自分の体験を信じてくれ
 と要求したことは一度もなく、ただ「ものの考え方を
 を教えてくれた」としか云えませんが、ほんとうの真
 理の伝え手は、思想そのものを伝えることはせず、
 それをもって、如何に考えるべきか々のヒントを与
 えるものであると私は思うからです。

大変災が発生するから宇宙船で助けてやるという
 約束は恐怖からのすばらしい逃避であり麻痺劑です。
 そしてそれは一つの段階につなぎとめて、あらゆる
 自己発見と覚醒とを停止させるイカリのようなもの
 でありまして、真実の進化した遊星人かそのような
 (と称されるもの)

イカリで地球人をつなぎとめようとする奇怪な伝説
 の意義には甚だ興味深いものがあります。

後記

◎十一月下旬にはアダムスキの親友である某夫妻が米
 国から来日される予定で、東京で私と会うことにな
 っております。そのときの探検はいずれお知らせし
 ませよう。

◎アダムスキの才三番目の著書『エライオン・ササキの別
 はあと一週間ばかりで私の手元に到着する予定で、
 着き次第に翻訳にとりかかりますか、出版できる
 かどうかはまだわかりません。しかし、できなくて
 もなんらかの方法で内容を、お伝え致します。

◎二賢向は、遠慮なくお寄せ下さい。できるかぎり
 のことは致します。

昭和三十二年九月二十日

高根原益田市益田百川

久保田八郎